

詩集

御神渡りおみわた

武井京

詩集

御^お神^み渡^{わた}り

武井 京

現住所 〒353 埼玉県志木市本町5-17-2
志木ファイブハイツC622
TEL 048-487-3301

詩集 **御神渡し** ゆすりか叢書3 1994（平成6年）10月7日

著 者	武 井 京
発 行 者	藤 森 里 美
発 行 所	ゆ す り か 社

〒392 長野県諏訪市諏訪1-5-19
TEL. 0266-52-0123・53-1861
FAX. 0266-58-0123
振替 長野 00550-9-33096

定 価	2300円（税込）
印刷製本	ミズノプリテック 株式会社

ISBN4-946488-03-0 C0392 P2300E

母子草（春）

茗荷 9

せんぶり 9

土龍 10

壁 I 12

壁 II 13

五加めし 14

馬蠅 16

美しさとは 18

海のある夢 20

墓地の石地蔵 22

もず 24

墓 24

柚子湯 25

落のとう 26

たたみい わし	た た み い わ し	母 子 草	て つ せ ん	梅 畑 の 福 寿 草	福 寿 草 と 語 る	沈 丁 花	曾 孫 と	辛 夷	木 犀	罌 粟	野 蒜	杏	金 糸 桃	お と き り そ う
		40	39			34	33	32	31	30	29	28		
41	(夏)			38	36								27	

素朴について	65
へその緒の詩 うた	62
花粉	60
梅桃 ゆすしらうめ の季節	58
南天	56
便り	55
彼岸花の朱いろが辛い	54
雑草よ したたかに	53
生える	52
草苺 くさいちご	50
いのちの声を聞こう	48
白い蝶	47
雑草の庭よ さようなら	46
山の芋	45
温 ぬく い雨	44

雑草のいのち 66

淋しくはない 67

故郷の永遠とわの祭 68

新しい幸せ 70

青大豆 72

この深い霧の中で（秋）

生きるのだ 73

種子 74

いぬたでの花 76

カラタチ 77

すすき 78

ザクロ 79

小菊を愛する 80

雑草の野みち 82

無花果 いちじく 83

柿の実 84

そつと生きている 86

風船かずら 88

揚げ羽蝶 90

ひよどり 91

雨滴 うてき 92

雷撃の刻 とき 94

なにもいらない風景 96

風船かずらよ 教えておくれ 98

霖雨 あめ 99

年寄りの孤独が本当の孤独だ 100

網走にて 102

この深い霧の中で 103

御神渡りおみわた(冬)

手 105

私は庭の雑草となる

根が在ることを 108

ひよどりはどこへ 110

掌 112

再び網走にて 114

雪の朝 116

民話 118

焼きむすび 120

寒鮓かんぶなの味噌汁 122

示唆しさ 124

生なる音は 126

無心のぶらんこ 128

雑草の息吹きは聴えない

和田峠への道

北風^{かぜ}を抱く

雪の雉子鳩

古い話

音^{おみわた}
御神渡り

132 130

134

135

136

極みを歩くもの

誰かのために

きく^{すもも}の詩

杏^{すもも}の実が落ちる

月見草の便り

アンテナの上の野鳩

熱情

鞭^{むち}

137

140

141

144

145

146

148

148

失われたもの

149

黙視

149

訪ねる

150

石段

151

ああ嵐とは今なり給う

山の川の濁り

156

欲望

158

さあ

159

孤住の土を掘る

160

小豆洗い

164

和田峠への道

166

灌ぐものは

168

あとがき

169

武井 京 年譜

172

ゆすりか叢書ノート

179

152

茗荷

茗荷が 芽ぶく
蔭地で
いのちが 育つ

せんぶり

野の草は
それのいのちを
人間の哀れに おくる
苦きかな

土もぐら 龍

祖先の慣習しきたりに

歲月を生きて來た

ふたたび みたび

血を絞る呻吟うめきにも

目をつむり 堪へて來た

背後うしろも闇 目前まへも闇

横を向いても地層の闇

かかる冷酷ひしせまる泥中に

ただホロ苦い虫けらの卵や

草根を食べ生きた

時には寂しさに堪へかね

血を吹くまで頭を突きあげ

地表を割るが

隙もる白光の針刺す恐怖に

身を縮め穴深くのがれるのだ

今は昼であるか 夜であるか

地表の音らに耳そばだてる

この音が

かかわりない くぎられた音というか

ああ焦心爪を立てる

かわいた唇を ふりふり

土屑を蹴る

壁 I

貧しさに粗塗りの土も崩れて

あらわな赤情を　むき出しにあなたはいる

掌をあてれば　ぼそぼそ冷いが

頬をふるれば温い血が流れていよう

心ちぎる疾風に　まとも向き

じつくりと大手をひろげ

土けむり立てても　しみじみと抱いてくれよう

言葉もなく齒を鳴らす感情を内向させ

黙って見守る　あなたに

耳を寄せ　身を寄せて

峡間を昇る霧のような音なき愛情に心を伏せる

壁 II

よるべなく背を寄せる

音もなく肩にうける

あなただ

屈曲した陽光ひの影

そこで 春はるが細々こまこまと崩れている

尖った心のたどる砂漠

私の生活たつきが 土けむり立てている

今日 塗りこめられた真実に

黙って近づくはあなただ

五加めしうこぎめし

細い棘とげを

器用に避けながら

母は

五加の

若芽を摘んで

飯に たきこんでくれた

荒れた

骨太の手が

鉄釜かまを 持ち上げ

わらの釜しきに下ろす